３０年５月一泊研修会

（古代吉備の歴史探訪の旅）

資料

① 吉備の古代史 （古川）
② 吉備の遺跡 （坂東）
③ 古代吉備の産業 （中井）
④ 桃太郎のおとぎ話と温羅伝承 （青木）
⑤ 「べんがら」と「吹屋ふるさと村」 （西谷）
（参加者名簿）
（吉備の古墳：編年と地域分布）

行程表

５月２２日（火）

８：00　近鉄・西大寺駅南口前　出発　（生駒交通マイクロバス）

西大寺駅 → 三木ＳＡ →　赤穂大石神社 → 昼食（お食事処・前田）→

吉備津神社 → 楯築遺跡 → 総社市文化財・学習の館 → 三宅酒造　→

宿泊：ピュアリティまきび

５月２３日（水）

８：00　まきび → 造山古墳 →　備中国分寺 → べんがら館 →

吹屋ふるさと村（自由散策：郷土館など） → 昼食（ラフォーレ吹屋） →

美作・追分ＰＡ → もちむぎの館 → 赤松ＰＡ → 西大寺駅（帰着予定 18 時頃）

奈良・人と自然の会

歴史文化クラブ

担当世話人：古川祐司・中井弘・青木幸子
鈴木末一・西谷範子・坂東久平

古代吉備王国探訪の旅　参加者名簿

番号	名　前	電話番号		
1	阿部　和生	090-1483-6340		
2	古川　浩	090-3485-8887		
3	吉村　さつき	090-5134-2636		
4	松尾　弘	080-2443-9691		
5	川勝　孝雄	0745-45-8062		
6	田代　一行	090-1027-7019		
7	福田　美伸	0774-73-5079		
8	小田　進八郎	0742-49-0341		
9	池田　富子	090-4567-1344		
10	上西　千代子	090-3655-6429		
11	冨井　忠雄	090-7496-8342		
12	森　英雄	090-8523-6795		
13	永井　幸次	090-6679-6336		
14	羽尻　嵩	090-5120-8151		
15	中野　達矢	090-8931-4078		
16	千載　輝重	090-5217-3413		
17	山本　妙子	090-9873-3189		
18	八木　順一	0774-55-4044		
19	弓場　京子	0774-72-5665		
20	岡崎　節子	090-5064-4671		
21	古川　祐司	090-4298-2344		
22	弓場　厚次	0774-72-5665		
23	鈴木　末一	090-1717-7332		
24	塩本　勝也	080-5035-0518		
25	西谷　範子	080-5355-6445		
26	坂東　久平	090-1893-8613		
27	中井　弘	090-2381-1122		
28	青木　幸子	080-1412-1131		

吉備資料①

吉備の古代史
（ヤマト王権との抗争）

（By 古川）

１．プロローグ

縄文時代、吉備の人々は北部の山地から流れる吉井川、旭川、足守川、高梁川の扇状地とその先に広がる沖積平野で生活をしていた。弥生時代前期には、平野部はまだ僅かであったが、中期後半以降に沖積作用が大幅に進み、旭川と足守川流域を中心に当地域で最も大きな平野部を形成した。農産物、海産物に恵まれて人口は大幅に増加し、多くの集落が生まれ、手工業生産もおこなわれて、吉備地区には特有の文化が発展した。

２．吉備社会の始まり

１）吉備の穴海・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・≪弥生時代地勢図≫

弥生時代の児島半島は独立した島で、現在の岡山平野南部はその内海（当時の言葉で「吉備穴海」と呼ばれていた）となっていた。ここに、吉井川、旭川、足守川、高梁川が流入し、その先端部に肥沃な沖積地を形成した。縄文晩期には、北九州地区に次ぎ日本最古の稲作が始まる（岡山市津島江道遺跡の水田遺構）。

２）吉備発展の始まり

弥生時代前期には、平野部はまだ僅かであったが、中期後半以降に沖積作用が大幅に進み、旭川と足守川流域を中心に当地域で最も大きな平野部を形成した。豊かな農産物と海産物は人口の増加をもたらし、集落の数が飛躍的に増加した。人口の増加は、手工業生産の発達（土器製塩やガラスの生産工房跡が多く発見される）につながり、さらには地域間の交易が繁栄をもたらした。

瀬戸内海交通の要路に位置した吉備は、大陸文化の受容に有利な位置にあり、他の地域に先立って畿内や出雲国と並ぶ一大勢力圏を形成したとされる。加えて、後には優れた製鉄技術を持つようになり、それがさらなる強国となる原動力であったとされている。

＊＊農業、手工業の発展、交通について（中井）

３）吉備首長連合の成立

弥生時代後期後半（２Ｃ後半～３Ｃ）には、備中南部を中心に有力な部族集団が形成された。特殊器台型土器・特殊壺型土器は、備中を主体に、備前・備後・美作に出土しており、吉備社会特有の葬送儀礼である。このような共通の葬送儀礼を基礎とした首長間の政治的結合関係により地域社会が形成された。

≪特殊器台型土器儀礼の分布図≫

４）吉備を代表する首長の出現　　＊＊楯築墳丘墓（坂東）

吉備社会の結合関係で中心的存在を占めていたのが、足守川流域周辺の首長層であった。楯築墳丘墓は、吉備の代表的首長のものと云われている。

この吉備地方独特の特殊器台・特殊壺は、特殊器台形埴輪、や筒埴輪となって、前方後円墳の重要な構造物となる（古墳時代初期の箸墓古墳・西殿塚古墳からも出土）。弥生時代後期には吉備とヤマトの首長間で相当以上の交流があったことを物語る。

３．吉備一族の始祖伝承

≪吉備氏３つの始祖伝承図≫

「古事記・孝霊段」によると、第７代孝霊天皇の第３皇子で、大吉備津彦命（おおきびつひこのみこと）元の名を「彦五十狭芹彦命（ひこいせさりひこのみこと）」が、弟の若日子建吉備津彦命と共に吉備を平定したとするが、吉備に土着したという記録はない。

吉備の首長として最初の名前が挙がるのは、応神天皇２２年紀の**御友別（ミトモワケ）**である。門脇禎二氏によれば、御友別（ミトモワケ）を盟主として兄弟と子を吉備諸地域の祖とする伝承は、吉備の首長層で広く支持されていた。この始祖伝承は、先祖たちが吉備に君臨していたころの系譜の一部を伝えているものとされる。

≪吉備始祖伝承応神２２年紀≫

① 吉備主張の系譜の中心にたっていたのは御友別で、「吉備国」全体にわたる王権を体現していた。他の者たちは「吉備国」内部の諸地域の支配を分担していた。

② この系譜は、二つの世代がそれぞれ兄弟関係で伝承されている。御友別を宗主として、吉備の首長が結合していたことを示している。（門脇禎二氏）

４．古墳時代の吉備　― ヤマトとの交流と抗争 ―

吉備には、100m を越える前方後円墳古墳が 18 基もある。これは奈良盆地、河内に次ぐ数と規模であり、吉備の勢力の大きさを物語っている。　≪吉備の古墳分布図≫

１）古墳時代前期（3C 後半～4C）　・・・・　ヤマト古墳文化の受容と共存

この時代、吉備はヤマト王権の影響下に入る。旧来の弥生式墳丘墓は消滅し、墓制は前方後円墳に統一される。　＊＊中山茶臼山古墳、浦間茶臼山古墳（坂東）

ヤマトと吉備の首長との間に一定の従属関係がうかがえる。ヤマトに次ぐ勢力としての地位を占め、共存関係が維持されていたと考えられている。

２）古墳時代中期（5 世紀）・・・・・　最盛期の吉備、ヤマトとの抗争

①最盛期の吉備（5 世紀前半）　＊＊造山・作山古墳（坂東さん）

備中の足守川流域には、ヤマトの大王陵に匹敵する造山・作山古墳が築かれた。その規模と造営に要した労力からみて、吉備の各地域の首長を統率し、専制的権力を持った大首長が存在したことを示している（門脇禎二氏は「吉備王国」とする）。

②５世紀後半、ヤマトとの抗争

この時期、高句麗の南進により半島情勢は緊迫する。倭国は鉄資源の供給地である南部伽耶地区（任那）の危機に対応するため、「倭の武王」雄略天皇は、国内権力の集中を図る。瀬戸内海航路の要地を占め、最大の地域政権の吉備は、国内統一を目指すヤマト王権にとって大きな障害となる。ヤマトは吉備の中心的な首長に対して、「反乱」の名目で屈服を迫り、その分断と支配に成功する。以下、日本書紀の記述による。

・下道臣の誅殺、上道臣の首長の排除

雄略天皇紀７年条（463 年）には、吉備の中心的な勢力であった下道臣前津屋を不敬の罪で一族を誅滅する。同じ年、残る有力者の上道臣田狭には、任那への赴任を命じ、その留守に妻（稚媛）を奪う。これを聞いた田狭は新羅へ奔る。

・星川皇子のクーデター

雄略天皇の死の直後（雄略 23 年８月）、吉備稚媛（田狭の妻・雄略の妃）と星川皇子（雄略と稚媛の子）はクーデターを起して大蔵を占拠するが、予期していた物部氏に鎮圧（479 年）される。吉備上道臣の一派は、星川皇子を支援するために 40 隻の船団を発進させたが間に合わず、クーデターは不発に終わる。

この後も、吉備の勢力の分割と制圧が進められた。吉備の首長は存続したものの、下道の首長を中心とするかつて統一体制は甦らなかった。

５．吉備の国造と屯倉（６世紀）　・・・・・・ヤマト王権による直接支配の進行

１）吉備の国造・・・・吉備一族は５つの国造として存続

ヤマト王権の統治は国造制度を柱として進められる。各地の首長に対し、服属を見返りに国造に任命し、支配権（軍事、裁判、刑罰、徴税）を与え、貢納義務を負わせた。

吉備国では、ヤマト王権との抗争があったにもかかわらず、旧来の支配層の一族が復活して５国造として認められた。上道国造・三野国造・下道国造・加夜国造・笠国造である。しかし、吉備一族以外から４国造（大伯、吉備中県、吉備穴、吉備品治）が周辺に配置されて、分断と統制が図られた。　≪吉備の国造一覧≫

２）吉備の屯倉（天皇の直轄地）・・・・蘇我氏による支配の浸透

６世紀、かつての造反地域である吉備国と筑紫国には、天皇の直轄地である「屯倉」が多く設置された。欽明天皇の大臣となった蘇我稲目は、屯倉政策を積極的に進め、渡来人の管理技術を活用して戸籍を作り、貢納を管理した。中央から官人が派遣される屯倉制度は、蘇我氏によって全国に展開され、権力形成の源泉となっていくのである。

（注）吉備では、欽明天皇の時代に設置された白猪（しらい）屯倉（美作地方の真庭市か）と児島屯倉が有名である。

・白猪屯倉は製鉄地帯で、米穀に加えて豊富な鉄資源の確保し、出雲への流出の抑える役割を果たした。
・児島屯倉は、岡山市にあり、漁業資源と塩業の確保と共に、瀬戸内海の制海権を吉備から奪い取るものであった。
・白井屯倉を総括した渡来人「白猪史胆津」　は正確な戸籍を作成した。

６．律令制下の吉備分国（７世紀）

１）国司を中央から派遣、国造は郡司に

大化の改新以後、中央から国司が派遣された。かつての国造は原則として郡司に任命されたが、徴税権、税の保管権、税の運用権などの郡司の権限は、やがて国司に移されて力を失う。なお、吉備国に赴任した最初の国司は「当摩広島」、皇族系の国司である。（壬申の乱の際、大海人皇子派と目され、大友皇子からの出兵を促す使者に斬殺される。）

２）吉備国の分国

持統天皇 3 年（689 年）の飛鳥浄御原令の発布をもって備前国、備中国、備後国に 3 分割する。さらに 20 数年後の和銅 6 年（713 年）に備前国から美作国を分立させた。

３）中央官僚化として活躍した吉備臣

吉備国の出身者は、中央に出仕して、宮廷官人として活躍する例が多くあった。彼らは、出身地にかかわらず「吉備臣何某」と称したが、「吉備臣」の始祖は日本書紀の記述に従って稚武彦（ワカタケヒコ）とした。

①吉備真備

奈良時代日本をリードした吉備真備は下道氏の出身、父は下道朝臣圀勝である。大和で生まれて育ち、地方官人の子弟として大学寮にはいり学問を究めた。阿倍仲麻呂、僧玄昉と共に遣唐使に加えられた。帰国後は、橘諸兄らと政治、学問の面で活躍し、**下道臣真備**と称した。

阿部内親王（後の孝謙天皇）の教育係（東宮大夫兼皇太子学士）を務め、天平 18 年（746 年）「朝臣」を賜姓されて**「吉備朝臣真備」**と名乗る。下道氏から宮廷氏族の吉備臣氏の一員に加えられた例である。

その後、造東大寺長官に任じられ、藤原仲麻呂の反乱鎮圧に活躍。宝亀 6 年（775 年）10 月 2 日薨去。享年 83。最終官位は前右大臣正二位。奈良教育大学の構内に真備の墓と伝えられる吉備塚（吉備塚古墳）がある。

②和気清麻呂

備前国藤野郡（岡山県和気町）出身、始めは藤野和清麻呂と称した。姉広虫は孝謙天皇に仕えた。弟の清麻呂は、藤原仲麻呂の乱平定の功労により、天平神護元年（765 年）

藤野和気真人清麻呂と賜姓される。

神護景雲 3 年（769 年）、宇佐八幡宮の神託事件で称徳天皇の怒りに触れ、別部穢麻呂と改名させて大隅国へ流罪となったが、称徳天皇の崩御により復権し豊前守に。

天応元年（781 年）桓武天皇が即位。才能を買われて延暦 2 年（783 年）摂津大夫、次いで民部卿に、延暦 7 年（788 年）には中宮大夫として高野新笠に仕える。平安京への遷都を進言して、延暦 12 年（793 年）には造宮大夫に。延暦 18 年（799 年）薨去。

7．吉備の神々と祖神伝承

1）吉備津神社・・・・・・・・・・・・・・・＊＊＊ボランティア・ガイドの解説による

吉備の中山は古来より神体山とされ、北東麓には備前国一宮・吉備津彦神社が鎮座する。当社には、当地を治めたとされる大吉備津彦命を祀り、命の一族を配祀する。

① 主祭神は大吉備津彦命（おおきびつひこのみこと）

主祭神には、第 7 代孝霊天皇の第 3 皇子で、元の名を「彦五十狭芹彦命（ひこいせさりひこのみこと）。「記・孝霊段」に若日子建吉備津彦命と共に吉備を平定したとする。「紀・崇神崇神天皇 10 年条」には、四道将軍の 1 人として山陽道に派遣された。

②相殿神・・・・大吉備津彦命の兄弟神を祀る。

・千々速比売命（ちちはやひめのみこと） - 大吉備津彦命の姉。
・倭迹迹日百襲姫命（やまとととひももそひめのみこと） - 大吉備津彦命の姉。
・日子刺肩別命（ひこさすかたわけのみこと） - 大吉備津彦命の兄。
・倭迹迹日稚屋媛命（やまとととひわかやひめのみこと） - 大吉備津彦命の妹。
・彦寤間命（ひこさめまのみこと） - 大吉備津彦命の弟。
・若日子建吉備津日子命（わかひこたけきびつひこのみこと） - 大吉備津彦命の弟。
・御友別命（みともわけのみことのみこと）・・・吉備一族の始祖
仲彦命（なかつひこのみこと）・・・・・・・・御友別命の二男

（注）相殿神の御友別命は古代豪族吉備一族全体の吉備臣の始祖。

『日本書紀』には「吉備津彦」の後裔氏族に関する記載はなく、弟の稚武彦命が吉備臣の祖とする。一方『古事記』では、吉備津彦命を吉備上道臣の祖、稚武彦命を吉備下道臣と笠臣の祖とする。岩本次郎氏、門脇禎二氏は、吉備の有力首長の最も古い始祖伝承は、「御友和命」で、その祖神は吉備武彦（稚武彦命の孫）であるとされている。

≪吉備の古代史　終り≫

（参考文献）：(1)）岡山県史　原始・古代編（1991 年）
(2) 吉備の古代史　門脇禎二（1992）
(3) 吉備の古代王国　鳥越憲三郎（1973）
(4) 吉備の弥生時代　岡山大学埋蔵文化財センター（2016）
(5) ウィキペディア（web）他

吉備資料②

吉備の遺跡

（By 坂東）

吉備の遺跡及び古墳の事を調べ、古代からの風土や弥生時代から古墳時代に掛けての遺跡を中心に取り纏めた。

１．吉備の歴史

今から 2 万年前の氷河期

には、気温が現在よりも 7～8 度低く、海水面も 130～140m 低かったとされている。日本列島は大陸とも陸続きになり、浅い瀬戸内海は、広大な草原となっていたと推定される。この時代は旧石器時代であり、四国のサヌカイトが、岡山県南部の海岸線から、数万年の歳月にたえた石器が、数多く発見されている。

縄文時代から人々は、南部の漁場と北部の山地からの恵を受けて、岡山県南部に広がる沖積平野で生活をしていた。

弥生時代前期には、平野部はまだ僅かであったが、中期後半以降に沖積作用が大幅に進み、旭川と足守川流域を中心に平野部が広がり、当地域で最も大きな平野部を形成した。これにより、人口は大幅に増加し、吉備地区特有の文化が発展した。

墳丘墓から前方後円墳への糸口となる「楯築墳丘墓」が誕生し、これが箸墓古墳誕生の幕開けとなった。

この時代の吉備独特の文化を代表するものを紹介する。

Ａ．平形銅剣（スライド参照）

弥生時代の青銅器としては、銅鐸が近畿地方から多く発見されるのに対し、銅剣は九州地方、中国・四国地方などに特に濃密に分布する。**平形銅剣は，弥生時代後期に瀬戸内海中部地域一帯に分布**している。剣形をしているが、たいへん扁平で幅広く、外見的にもぺらぺらの形状で、マツリに使用したと考えられている。

Ｂ．分銅形土器（スライド参照）

円形の左右にえぐりを入れた土製品で、江戸時代の天秤に用いられた分銅の形に似ている。**吉備地方を中心に中国、四国、近畿地方に分布**する。

厚さはせいぜい 1cm くらい、長さ 10cm 内外のものが多く、表面には、細かい櫛目文が付けられたり、ふちに小さい穴がずらりと並んでいたりするのが、ごく一般の形である。表裏を貫通する孔が開けられたものや、顔を描いたものもある。用途として、仮面、バッジ、護符などの説があるが、明らかではない。

大陸からの新文化受け入れの門戸である**北九州**と、弥生文化の先進性を持つ**大和**との**中間**にあって、巧みに文化の吸収を続けながらも、**その地方のもつ地位と伝統に裏付けられた文化が、こうした分銅形土器や平形銅剣にうかがえられる。**

邪馬台国と吉備

魏志倭人伝に登場する「**投馬の国**」が、五万余戸を有する大国であったことから、投馬国は、吉備にあったとの説もある。新井白石の備後国鞆説では、鞆のほかに、玉（玉野市玉）、玉島（倉敷市玉島）などである。

C．その他の土器（スライド参照）

＊黥面（げいめん）土器：入れ墨をした顔を表現した黥面を描いた土器。

＊手焙形土器：甕とも壺ともいえない形をしており、民俗資料の手焙に似ている。

何れも、集落のマツリの場で使われたとされる。

D．上東式土器と特殊器台（スライド参照）

・**上東式土器**：弥生時代後期になると、畿内を中心に出土する土器にくらべて、かなりちがった一種独得の性格を備えた土器が、吉備の地に出現してくる。

頸の長い壷は、その長い首にまるでいくつもの輪をはめたように、何本もの線が描かれており、胴の大きさは壷の高さに比較すると小さく、全体に長い頸が目につく器形である。

・**特殊器台**：弥生時代の後半になると、径 50cm 近くもある大きなものから、径 10cm くらいの小さなものまで、各種にわたる器台形土器が、一般の弥生時代の集落址と思われるあたりから、多数発見されるようになる。

弥生時代の終わりに、この土器は墓に供えられ、飾られた器台と壷であった。その筒形の胴部には、弥生時代からあった、Ｓ字を横にしたような文様のモチーフや、綾杉や鋸歯のような刻線文が、複雑に変化して美しい文様となって描かれ、文様を区切るように、また長い筒形の胴を補強するように、「たが」が何段も取りつけられる。

特殊な壷は、長頸壷から変化したものである。胴張りの部分に、二本か三本の「だが」を貼りつけ、「たが」の間や「たが」の上で壷の肩になる部分に文様をつけて飾っている。特殊器台も特殊壹も、きれいに丹塗りされた美しいものだった。

上東式土器が、特殊器台や特殊壷に変化したとされる。特殊器台と呼んでいる土器群の分布の中心は、吉備の地であった。**この特殊器台や特殊壷はヤマトの箸墓古墳やその他の古墳群でも、発見されるようになる。**

２．墳墓から古墳へ（スライド参照）

弥生後期の墳丘墓は、出雲の**四隅突出墓**、筑前の平原遺跡の**方形周溝墓**、大和の**方形周溝墓**などがあり、**備中の楯築墳丘墓**からの発展形として、**纒向の纒向型前方後円墳と箸墓の巨大前方後円墳へと変化して行く。**

楯築墳丘墓に現れた「特殊器台や特殊壷」は、前期、後期、終末期変化し、大和の古墳に出現する。

（1）古墳編年（吉備）と（大和）：別添資料（スライド参照）

（2）吉備の主な古墳

吉備は瀬戸内海航路の要衝にあり、海を見晴らす山の上や、平野部を見下ろす山の上に主な古墳が築造されている。

吉備には100m超の大型前方後円墳が15基あり、大和の40基に次いで、河内の15基、和泉の10基と肩を並べる規模である。

複数の王権が存在したものと考えら、古墳の系列が複数に別れる。

一例として、**吉備系とヤマト系と見られる対照的な古墳が旭川を挟んで対峙**しており面白い。（ほぼ同時期の築造と推定される）

＊備前車塚(48)

4世紀初頭　三角縁神獣鏡11面・内行花文鏡1面・画文帯神獣鏡1面の計13面の銅鏡が出土、三角縁神獣鏡11面のうち9面は、椿井大塚山古墳との間で同笵関係にある。（ヤマト系）

＊都月坂(33)　4世紀初頭　前方後方墳、鏡などはなく、特殊器台と特殊壺が出土（吉備系の典型）

＊備前地区（旭川、砂川、邑久平野）の巨大古墳（6基）

・玉井丸山(130?) 未調査
・浦間茶臼山(140)　3世紀末
・神宮寺山(150)　4世紀後半-5世紀初頭頃
・金蔵山(165)　4世紀末から5世紀初頭
・湊茶臼山(92)　4世紀末-5世紀初頭頃の築造
・両宮山(192)　5世紀後半頃、2重周濠を採用して「ヤマト系」の様相が強い点、および、葺石・埴輪が見られない点が注目される

＊備中地区（足守川、高梁川）の巨大古墳

・中山茶臼山(120)　3世紀後半から4世紀頃
・尾上車山(135)　4世紀後半頃または4世紀中葉頃
・小盛山(110)　丘陵端に築造された大型円墳、4世紀後半、後続する首長墓としては、佐古田堂山古墳・造山古墳と続く系譜が推測される。
・佐古田堂山(150)　5世紀頃の築造

・造山(360)：ぞうざん　5世紀前半（古墳時代中期）の築造、岡山県では最大、全国では第4位の規模の巨大古墳で、5世紀前半（古墳時代中期）の築造、中世末には城砦となっていたため、相当の部分が作り直されていると推測されるが、造出や周濠が存在する。
・作山(286)：さくざん、5世紀中頃

・宿寺山(118)　5 世紀中頃
・こうもり塚(100)　6 世紀後半、石舞台に匹敵する巨大な石室を持つ。
（石室は両袖式で全長約 19.4m、玄室は奥行 7.7m・幅 3.61m・高さ 3.6）

３．主な遺跡

・吉備津神社

吉備国の総鎮守であったが、吉備国の分割により備中国の一宮とされ、備前国・備後国の一宮に別れたが、備中の吉備津神社は「吉備総鎮守」「三備一宮」を名乗る
主祭神は大吉備津彦大神（吉備津彦命）で、孝霊天皇の皇子・彦五十狭芹彦命（五十狭芹彦命）とされる。崇神天皇 10 年、四道将軍の一人として山陽道に派遣され、弟の若日子建吉備津彦命と共に吉備を平定した。
本殿は独特の比翼入母屋造（吉備津造）で、拝殿とともに国宝に指定。
また社殿 3 棟が国の重要文化財指定されるほか、特殊神事の鳴釜神事が有名である。
（備前国の一宮は吉備津彦神社で、中山の北東麓にある）

・中山茶臼山古墳：神体山の中山に、墳丘長 120m の前方後円墳があり、
宮内庁により「大吉備津彦命墓」として治定されている。

・楯築遺跡（楯築墳丘墓）（スライド参照）

弥生時代後期(2 世紀後半～3 世紀前半)に造営された首長の墳丘墓である。墳丘の各所から出土した土器片の多くが壺形土器、特殊器台・特殊壺の破片である。直径約 43m の**不整円形の主丘に**北東・南西側にそれぞれ**方形の突出部を持ち**、現在確認されている突出部両端の全長は 72m で**同時期の弥生墳丘墓としては日本最大級**である。

・備中国分寺（備中国分寺跡が史跡）

奈良時代に建立された国分寺のうち、備中国国分寺の後継寺院にあたる。
寺伝では、廃寺となっていた国分寺を天正年間に備中高松城主・清水宗治が再興したが衰微し、江戸時代中期の宝永年間（1704 年-1711 年）に再建されたとされる。
＊五重塔（重要文化財）は、高さ 34.32m で、南北朝時代に奈良時代の七重塔（推定高さ 50m。塔跡が残る）を焼失したのち、1821 年（文政 4 年）に位置を変えて再建を開始、弘化年間（1844 年-1847 年）に完成した。

以上

（参考文献）
(1) 吉備の古代史　門脇禎二（1992）
(2) 古代吉備王国の謎　間壁忠彦・間壁葭子（1995）
(3) 吉備の弥生時代　岡山大学埋蔵文化財センター（2016）
(4) ウィキペディア（web）

吉備資料③

古代吉備の産業

（By 中井）

１．古代吉備の手工業生産

・稲作・鉄・塩生産と吉備王国の出現

弥生時代の吉備地方は、稲作のための温暖な気候に恵まれていた。弥生時代初期、この地にやってきた渡来人たちは、旭川・吉井川・高梁川・芦田川・足守川下流の沖積デルタ地帯に湿地が広がっているのを見て水稲栽培を始めた。「津島遺跡（岡山市）」は北九州の「板付遺跡」とともに、日本で最も早く稲作が始まった地域といわれている。

中国山地の花崗岩地帯は、多くの砂鉄を含んでいた。吉備地方は鉄資源に恵まれ、「たたら製鉄」の生産では、出雲を凌ぐ一大生産地であった。石器に代わって鉄製の鎌や鍬、鋤といった農業土木用具をいち早く普及させた農耕は、飛躍的に生産効率を上げた。

また瀬戸内海沿岸や島々では、土器製塩により全国に向けた塩の一大供給地となった。古墳時代の吉備は、こうして得た豊かな経済力で多くの人口を支え、更に山陽道・瀬戸内海などの陸海交通の要衝に位置していたことで、大和に対抗しうる吉備王国を出現させた。

（1）古代吉備の製鉄産業

・真金吹く吉備

古今集（1082）に次の一首がある。

「真金吹く　吉備の中山　帯にせる　細谷川の　音やさやけさ」

「真金吹く」は吉備の枕詞で、「鉄を作る」と解釈され和歌に詠われるほど吉備は古くから鉄生産が盛んだったことを示している。平城京跡から出土した木簡によると、当時、鉄と鍬を都に貢納していた国は、美作・備前・備中・備後の 4 か国にほゞ限られていた。

・吉備の鉄生産

日本における鉄生産は古墳時代後期（6 世紀後半）に始まった。現在日本で最も古いといわれる製鉄遺跡は、血吸川上流の「千引カナクロ谷製鉄遺跡」とされる。更に「上神代狐穴遺跡（かみこうじろきつねあな）（岡山県新見市）」でも 6 世紀末の製鉄遺跡が確認されている。吉備では今までに製鉄遺跡は約 30 遺跡、製鉄炉は 100 基以上が発掘され、その数は他に類を見ない多さである。

特に備中の総社市域に集中しており、奥坂遺跡群の 11 遺跡では 82 基の製鉄炉が見つかっている。やはり奈良時代までは「まがね吹く吉備」であった。このような吉備の鉄生産を支えた背景は、中国山地の鉄鉱石や豊富で良質な砂鉄に加え、木炭の原料供給地である森林が拡がっていたことである。

風化した花崗岩、即ち砂鉄から鉄を採取する技術**「たたら製鉄」**は、箱形炉による「たたら」へと進歩して生産効率は上昇し、中国山地を中心に発展した。（スライド）

・千引カナクロ谷遺跡

鬼ノ城の東山麓、血吸川源流の「阿曽郷」にてゴルフ場建設調査で幾つもの製鉄遺跡が発掘された。「真金吹く」古代吉備の大製鉄地帯の中心部が「千引カナクロ谷遺跡」である。3 基の製鉄炉は 6 世紀後半のものとされる。現在は埋め戻されたが発掘された製鉄などの遺跡は 17 遺跡が数えられる。その中で 4 号炉は一回り大きな地下構造に石を丁寧に使用した、国内最古級の製鉄炉と判明した。作業面や排滓溜まりから、鉄鉱石の小片と共に出土した須恵器から 6 世紀後半のものと判断された。

時代が少し下り、7 世紀、唐の侵攻に備えた山城「鬼ノ城」が完成し、城中で武器生産が行われていた鍛冶工房が見つかっている。隣接する千引カナクロ谷で生産された鉄を使って武器を生産していたものと見られる。

・木簡に見る鉄製農機具貢納

平城宮址から発掘された木簡は、各地から朝廷に送られてきた品物の荷札が多いが、その中に吉備国から貢納された鉄や鍬のことが書かれた木簡が数多く見つかっている。

下記の木簡に書かれた文字から、天平時代の備中の血吸川や足守川の辺りで作られた「鍬」が、はるばる大和朝廷に、税の一部として運ばれてきたことが分かる。

＜例＞備後國三上郡　調鍬壱十口　天平十八年　（746 年）　（スライド）

備前国では和銅 6 年（713）、備前北部の砂鉄地帯が美作として分国されたため、砂鉄が十分に調達できなくなったようだ。延暦 15 年（768）、「日本後記」には、かつては鉄の大生産地であった備前国が、貢納のためにわざわざ鉄を買わねばならなくなり、調の鉄を絹に改めたいという記事が見られる。つまり備前国では鉄鉱石が枯渇し、さらに美作が分国されたため自国で砂鉄も確保できなくなり、今までの鉄鍬の調を絹に変えたことが分かる。

・備中鍬

備中鍬と言われる農具は、二本から五本の歯を持つ備中の代表的な農具で、生産量も多く全国に知られていた。「延喜式」にも美作・備中・備後の調として鉄鍬があげられていて、平安時代にもかろやかに田打ちのできる良い鍬として、吉備の特産であったことが分かる。こうした吉備の鍬が豊かな農地を生み、吉備王家の力を育んだ。

・長船の名刀（鎌倉時代）

和銅 6 年（713）に美作国が分国する以前にあっては、備前国は美作地域の豊富な鉄を南部に運んで鍛冶が盛んであった。それが和銅以降、美作から鉄を自由に運ぶことが出来なくなって、備前の鍛冶は衰えていった。

ところが鎌倉時代を迎えて刀剣の需要が急増し、それまで細々と続けてきた備前の鍛冶職人は刀剣の製作に注力し、多くの刀工を輩出した。彼らは山陽道沿いの長船に居を移し、長船刀工として有名になり、後世に伝わる多くの名刀がつくられた。

（２）古代吉備の製塩

・土器製塩　（スライド）

土器製塩の開始：吉備地方は西日本では最も早く、弥生時代中期に当時は島であった児島周辺で始まった。古墳時代に入ると土器製塩は瀬戸内海沿岸一帯（牛窓・児島・倉敷など）に広がりを見せるなど各地で製塩遺跡が見つかっている。

古代の製塩法は、沿岸部の海水に含まれる 3%程度の塩を塩結晶として取り出すため、風・太陽熱・砂の地熱を利用してまず水分を蒸発させて濃度を高めた後、煮沸工程を行って濃縮していた。この煮沸行程に土器を用いる製法が「土器製塩」である。この製塩法は長時間加熱するため土器の消耗は著しい。そのため夥しい量の粗雑な土器片が遺跡に散乱して発掘されるのが、土器製塩法の特長である。

専業化の進展：自己消費用に小規模採取するだけであれば、通常の煮沸用土器で十分である。土器製塩は塩の大量生産による他地域への供給がみられ、集団間、地域間の分業が開始されたことを示している。　結晶塩は土器に詰め、焼きしめて遠くに運ばれた。内陸部の美作国府跡（津山市）などで大量の焼塩土器が見つかっている。平城宮跡でも焼塩土器の破片や、備中国から塩が税として運ばれたことを示す荷札の木簡が見つかっている。

（３）備前焼　（スライド）

古代吉備国の重要産業と云えば、鉄・塩に加え陶器があった。弥生時代の土師器ではなく、古墳時代から始まった新しい技術による須恵器のことである。それまでの焼物は野焼きに近い方法であった。そこに朝鮮半島からの渡来人によって、千度以上の高温を維持する焼成技法による「須恵器」が造られるようになった。吉備国でも椀や皿、壺などが各地で生産され、今でも須恵・陶など「スエ」の地名が残っている。

平安時代の延喜式によると、吉備国の中では備前だけが貢納地になっており、その量は他国をはるかに凌駕する記述が残されていて、備前で生産される須恵器がひとつの重要な産物となっていたことを示している。「寒風窯」ブランドの製品の調は高く評価され、窯印も刻印され断然高いレベルと美しさを誇り、出土物から大寺院の鴟尾、大壺など大型のものを得意としたようである。平安時代も吉備国で作陶の煙は途絶えなかったという。

しかし中央では中国の三彩や青磁・白磁のような釉薬をかけた美しい容器を用いるようになっていった。こうした変化になかで、備前では薄く繊細で、優美な造りの技術は更に進み、日本の作陶史上もっとも優れた轆轤技法を有したとされる。

鎌倉時代末ごろから、本格的な備前焼を思わせる酸化焔で焼かれた、硬くそれでいて素朴な赤肌の焼物が出現するのである。かつての須恵器が持つ独特の灰青色のくすんだ色は失われ、なじみ深い赤肌の「備前焼」が誕生した。

２、古代瀬戸内海の物流

（１）古代の瀬戸内海水運　（スライド）

古くより瀬戸内海は交通の大動脈として機能し、北部九州（大宰府）と畿内（難波津）の２つの拠点を結ぶ主要な航路として役割を果たしてきた。それに加えて大陸文化の流入

や、朝鮮や中国への使節（遣唐使・遣新羅使）が畿内から目的地に向かう交通路としても重要になっていた。

そのため大和朝廷は瀬戸内海一帯の港の整備に力を入れ、難波津から播磨、備前、備後、安芸を経て九州の筑紫へ続く諸港・屯倉を開いた。平安時代になり荘園が発達すると、瀬戸内海航路は公租としての物資の運搬や荘園年貢の輸送の動脈として、また朝鮮半島や中国大陸との交易の主要ルートとして、一層の繁栄を遂げた。

国が統一され、律令国家体制が形成されると、瀬戸内海沿岸でも農業生産物を中心に塩や海産物のほか、さまざまな特産物が作られ、政権に貢納されるようになった。

奈良時代には陸上の交通路（山陽道や南海道）として駅家などが整備された。しかし8世紀になると物流は輸送力で勝る海上交通に移行し、瀬戸内海は再び中心的な交通路としての役割を担うことになった。

（２）古代の瀬戸内海と吉備

瀬戸内海は大阪湾から明石海峡を通り、播磨灘・備讃瀬戸を経て備後灘、安芸灘、伊予灘、周防灘から関門海峡に抜ける、およそ 400km の自然の水路である。干満差は 3m 以上、時速 10～20km という激しい流れ、海面に現れた岩礁だけでなく、水面下にも無数の岩礁が隠れている難所であった。さらに１日２回ずつ東西に強い流れがあり、全体としては東にながれている。

東西から押し寄せる満ち潮も、東西に引く潮も、吉備の辺りで流れを一度止める。だから吉備のあたりは潮待ちのポイントになり、瀬戸内海を航行する船は必ず吉備の沿岸に船を寄せ、潮待ちする必要があった。停泊し汐待ちをして、食糧や水を得る港がなければ航行は難しかった。潮流を利用すれば、非常に強い推進力を得られ、労力少なく船を進ませることができる。

大和朝廷は、瀬戸内海を制するには中央部に位置し、複雑な航路を熟知した吉備を支配しなければならなかったのである。6世紀の雄略天皇の時代、朝廷は食糧供給基地として、汐待ちの港として、播磨・備前・備後・安芸を経て九州まで数多くの「屯倉」を開き、頻繁な通行を可能にした。

（３）吉備を繁栄させた水運

吉備地方は中国山地から瀬戸内海に流れる四大河川があった。吉井川・旭川・高梁川・芦田川である。これらの川は瀬戸内沿岸と内陸部を結ぶ重要な物流の交通路で、農産物・塩・鉄などが運ばれた。特に中国山地で生産された重量物の鉄や、鉄製品は船によって川を下り大動脈の瀬戸内海で都に運ばれた。瀬戸内海は人や物や情報が行き交う海上交通の大動脈であり、ほゞその中心にある吉備は海上交通権を掌握し、また吉備の勝れた造船技術や航海技術が、吉備王国の出現に果たした役割は大きい。

≪参考文献≫・吉備の古代史（門脇禎二）・古代史の謎は「海路」で解ける（長野正孝）・吉備の古代王国（鳥越健三郎　・中国山地のたたら製鉄（広島県立歴史民俗資料館）・古代を考える「吉備」（光永真一）

吉備資料④

桃太郎のおとぎ話と温羅伝承

（By 青木）

１、物語の起源について

物語の発生年代は正確には分かっていないが、室町時代とされ、江戸時代以降に広まったとされる。草双紙の赤本による『桃太郎』『桃太郎昔話』などが出版により広まった最初の版であるとされる。

物語の成立については諸説が存在するが、有力説の一つとしては、第７代孝霊天皇の第３皇子彦五十狭芹彦命（吉備津彦命）と稚武彦命兄弟の吉備国平定における活躍と、岡山県の温羅伝説に由来するものとする説がある。**これは、古代の大和政権と吉備国の対立構図を、桃太郎と鬼の争いになぞらえたとするものである。**

（注）

「吉備津神社縁起物語」（藤井 駿：「吉備津神社」）によると、吉備津彦命が、犬飼部の犬飼健命（いぬかいたけるのみこと）、猿飼部の楽々森彦命（ささもりひこのみこと）、鳥飼部の留玉臣命（とめたまおみのみこと）という三人の家来と共に、鬼ノ城に住む「鬼」である温羅を倒したとされているが、この家来たちを桃太郎の逸話に置き換えると「犬飼健=犬」「楽々森彦=猿」「留玉臣= 雉」になるとする。

２、桃太郎のはなし

（１）桃太郎のモデルになった吉備津彦命伝承

古代日本の皇族。第７代孝霊天皇の第三子で本名を彦五十狭芹彦命という。日本書紀では吉備津彦命、古事記では大吉備津日子命と言われ、現在の奈良県磯城郡田原本町に生まれる。

（注）

７代孝霊天皇は磯城郡田原本町黒田に廬戸宮（いおとのみや）を設けた。孝霊神社の350m 北西の法楽寺（聖徳太子開基）に孝霊天皇黒田廬戸宮跡の石碑がある。彦五十狭芹彦命の故郷である田原本町では、初瀬川の川上から男の子が甕（かめ）に乗って流れてきて、西の方角に向かい神様となったという伝承が残る。西の方とは、『古事記』や『日本書紀』の孝霊天皇、彦五十狭芹彦命の記述から、吉備（岡山）や讃岐（香川）をさすと考えられている（林羅山：本朝神社考）。

勅命により四道将軍の１人として西道（山陽道）に派遣された。異母弟の稚武彦命（若日子建吉備津日子命）とともに吉備国を始め山陽道に沿う周辺域を平定、この事によって「吉備津彦」を名乗る事になったといわれる。

（２）鬼のモデルになった温羅伝承

岡山県において広く語り継がれている伝説によると、昔、岡山に鬼がいた。温羅（うら）と呼ばれるその鬼は、もとは百済の王子だったという。（温羅の出自については百済渡来

説の他に、出雲渡来説、九州渡来説などがある。）

巨躯、赤髪の異様な姿で性格はきわめて凶暴。 いまの吉備津神社から西北へ 10km ほどのところの片岡山に作った「鬼の城」を拠点に、暴虐の限りを尽くして人々を恐怖のどん底に陥れていた。力の弱い女や子どもをさらい、逆らう者は釜ゆで、城の近くを通る船を沈めることも。吉備の人々は都へ出向いて窮状を訴えた。朝廷から派遣されたのが吉備津彦命である。

（３）吉備津彦命の戦いの伝承

吉備津彦命は吉備の中山に石の盾を築き、石の上に置いた矢（吉備津神社に吉備津彦命が矢を置いたといわれる矢置石）で温羅を倒そうとするも、温羅も矢で反撃。吉備津彦命の放った矢と温羅の放った矢がお互いにぶつかり合って、なかなか勝負がつきません。吉備津彦命は 2 本の矢を同時に放ちます。すると、1 本の矢が温羅の目に当たり、温羅は大量の血を流し、血の川となり海へ流れ込みます。（血吸川）（赤浜）温羅はその姿をキジに変化させ逃げようとするので、吉備津彦命もタカとなり追いかけます。しかし、吉備津彦命が温羅に追いつきそうになったところで、温羅は今度は鯉になって川に逃げ込んでしまいました。すると、今度は吉備津彦命が鵜に姿を変え、温羅を追いかけて捕まえました。（鯉喰神社）

（４）温羅の首と鳴釜神事

温羅は、吉備津彦命に首をはねられました。討たれた温羅の首は晒されることになったが、討たれてなお首には生気があり、時折目を見開いてはうなり声を上げた。気味悪く思った人々は吉備津彦命に相談し、吉備津彦命は犬飼武命に命じて犬に首を食わせて骨としたが、静まることはなかった。次に吉備津彦命は吉備津宮の釜殿の竈の地中深くに骨を埋めたが、13 年間うなり声は止まず、周辺に鳴り響いた。

ある日、吉備津彦命の夢の中に温羅が現れ、温羅の妻の阿曽媛に釜殿の神饌を炊かせるよう告げた。このことを人々に伝えて神事を執り行うと、うなり声は鎮まった。その後、温羅は吉凶を占う存在となったという。吉備津神社の鳴釜神事は、釜の上に蒸篭（せいろ）を置いてその中にお米を入れ、蓋を乗せた状態で釜を焚いた時に鳴る音の強弱・長短等で吉凶を占う神事。強く長く鳴るほど良いとされる。

≪桃太郎伝説終り≫

吉備資料⑤

「べんがら」と「吹屋ふるさと村」

（By 西谷）

１、べんがら（弁柄、紅殻）

（１）「べんがら」とは

・Bengal（オランダ語）。日本ではインドのベンガル地方産のものを輸入したため、「べんがら」と名付けられた。酸化鉄（Fe2O3）を主成分とする赤色酸化鉄顔料の一般名。
古くは、中国から輸入したり、鉄分を含んだ粘土を焼いたり、鉄さびから採取して作った。ラスコーやアルタミラの洞窟壁画にも見られ、旧石器時代から作られた最古の顔料である。
日本でも弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて生産された土器にも、赤く彩色されている。

（２）べんがらの製法

製法はいろいろあるが、吹屋では銅を採掘する時、その副産物の硫化鉄鉱石を原料として、硫化鉄　鉱石を酸化、還元させて製造する。

<u>江戸時代、明治時代のべんがらの作り方</u>

① 鉄鉱石を砕く。
② 硫黄分を除く。
③ 不純物を沈殿させ、「緑礬」（りょくばん、ろくは）という結晶を作る。
④ 松の薪で 2 日間、700 度で焼き続ける。
⑤ 水洗いして石臼で粉にする（3 回くりかえす）。
⑥ 粉の中の酸を水に溶け出させる→べんがらの成分が沈殿する。
⑦ 上澄みを捨て、水を入れる。（10 回～100 回くりかえす）
⑧ 板に塗り伸ばして天日干しにする。

この製法はベンガラ館でその工程を見ることができる。

（３）べんがらの特徴

着色力、隠蔽率が強く、耐熱性、耐水性、耐光性、耐酸・アルカリにも　強い。防虫、防腐、防錆、があり無毒で安全のため、多方面に重宝された。べんがらの欠点は彩度が低いことで、鮮やかなものは橙赤色をしているが、彩度が低いものは赤褐色をしている。一般的に褐色の顔料として認識されていることも多い。しかし吹屋のべんがらは品質が格段に優れ、「赤の中の赤」として珍重された。今、豪商の西江家に保存されていて、見ることができる。

（4）べんがらの用途

・染料としては絵具、糸を染めて染織、漆器や陶器の絵付け、家屋の木材や壁に塗る。（べんがら格子など）また防腐、防錆などがあるため船底塗料として使われた。緑蕃は薬用としても使うことができた。

高品質のものは歴史的建造物の塗装や文化財の修復に使われ、現在も日光東照宮の修理、首里城の復元に使われている。

（5）べんがらの歴史

・吹屋べんがらの誕生は江戸時代 1707 年（宝永 7 年）で、本格的生産は 1751 年（宝暦元年）より 1974 年（昭和 49 年）まで続く。

「火鉢の中の焼けた石を庭先に捨てたら、降っていた雨にぬれて水が赤くなった」これにヒントを得て、鉱石を焼いて水洗いすれば、赤い色素を得られることを偶然に知ったという逸話が残っている。

・当時の代官、早川八郎左衛門正起はべんがらの商品価値を見抜き、吹屋で独占的に製造することを奨励した。べんがらを生産するにあたって株仲間を組織させ、ローハの総量規制や値下げ競争の禁止を規定した議定書を作り、吹屋べんがらの商品の安定と発展に尽力した。

販売方法も、江戸時代は大阪商人を通じて販売していたが、明治時代は吹屋商人が直接全国と取引するようになる。また海外までも広がった。

このおかげで、江戸、明治、大正、昭和にかけて吹屋は繁栄をほしいままにする。

2、吹屋ふるさと村

（1）吹屋の町並み

赤銅色の石州瓦とべんがら色の外観で統一された、「べんがら長者」たちが残した町並みである。吹屋の特異な所は、個々の屋敷が豪華さを競うのではなく、旦那衆が相談の上で、石州（島根県）から宮大工の棟梁たちを招いて、町全体が統一されたコンセプトのもとに建てられた。当時としては驚くべき先進的な思想である。

昭和 52 年、文化庁から国の「重要伝統的建造物群保存地区」の認定をうける。

（2）見所

吹屋地区には旧片山家（重文）、本長尾家、郷土館（旧商家）、資料館（旧役場）、ベンガラ館（最後のべんがら製造所）、ラ・フォーレ吹屋（旧中学校）、旧吹屋小学校（日本最古の木造校舎）、山神社などがある。

また他地区に、銅山採掘とローハ製造（べんがらの原料）で巨大な富を築いた豪商の館や施設、坑道があり、見学することができる。

（メモ）